芝齊集

獨照囊

世英題

京六
長屋
角

月の
長屋
廿七角

芝齊居士略伝

芝齊居士姓林氏通称與吉号
雪散居信州上諏訪町人藤川屋
一茂嫡子也以元治甲子六月三日生
幼志文藝就父学揮花伎遊方多
年好投岩波其残翁室傳衣鉢
及門者頗多明治辛丑正月題俳歌
一首於壁去至東京既寓居本所

桃青寺殷提示俳道門庭隆盛壬寅
初春偶得微恙六月十一日遽書月
影遺唫泊然唯化年僅卅九居士
資性聰慧又能繪画巧于人物
遠近競需所著有正風心得録五
智日記芝齋句集等數卷

大正丁巳四月

厚知　晋雪人謹記

遺稿

隅田川や春水にうるの浮草
屋の棟や御降濡るる小雷盆
栄耀の上なる輪注連哉
曙や白のむらさき小豆粥
正月や一日仏域寺まゐり
正月や振袖きたる異人の子
梅のもとく孤村へ捨て行

梅の月夜や

先白ふ青郎つの事かふ

学の千葉を潜る小家ゝ

竹原や百学の聲和す

春雨や葉物屋すひとりゐ

から濠や蔦蔵の音つ毒の音

晴や花のおくより磬の音

明星や仏法僧ゝ花ゆく

花の白やくゝ揺るや蹴り立す

主や誰撥の中に入る柩

糸撥蒲山屋のうしろより

濡前へ山吹ちるやつさい堀

前文略

産聲八隣の宿かほとゝぎす

時鳥雲ゝ落ちむ水の音

十日程箱根に遊ぶ袷かな

我を知る友に酒賣る翁あり

みゝの夜や臨終勧める鉦の音

芭蕉庵桃青ちに入て

何ものか知らず玉巻芭蕉かな

白蓮や和蓮の冥の其中に

天の川浮世ふるゝ涼しさ哉

絵日傘や知らで伸よき言草

蓮や病勝ふる姉が ふしぎ

稲妻へ網打かける小舟かな

秋出や天平までハ遠方の國

岩こすし時鳥の咽ちんゆる

錦まハ土龍にかけて時蛍刈

唐津ら

湖の上に霧ハ流して宵の月

河内路や綿売ふる夕時雨

打たんたら狸弔ふしぐれ哉

妻の傘二人用へかすゝ時雨

しなゝゝや縞絹買たし銭ハなし

住捨てりや冬田を鋤かひて
寒月や松明道に投てある
山蘭も一つ捨火の炉辺

追善五十韻　　芝齊居士

冷々とちら向ても月は影
いつを昔の垣はふつ艸　夫弦
鮮遍近中碓挽て遊ふらん　雪人
きいろう人はみふ童おり　柴戸
尊さハ茶色ゑりぬひ南頭巾　惟醉
弦の捨そみ〻かきに足休　芦雪
うつろ舟志の埃を吹うあて　芝池
蚕起すと母中告越寸　禎山

稲木の接穂めでたき大悪閣　三朝
白露ふ油のふりみ降らすこと　魚木
馬の背年三日の糧を調へ　銀川
古よを興す撰集の沙汰　唯一
淋しきに藁麝を砕く多賀氏　金谷
越の遊女のひとり　酒　康　訥堂
月の出に生義人の名に立て　芝軒
艸すり重ね雪の八臥　如仏
石樽を芋の径年見つけた盃　義碧

何年嘗提志ほ〳〵家　と戈尼
打ちて市女乗巻と雨北りに　似水
領主の情文年少ゆ康　知老
青牛北角にかけ〳〵る花の枝　雲舟
雪解乃水よ活す　板　樗　樵舟
穴倉を毀ち一土の陽炎ひて　一左
丙日陵北又はやる亜来る　明哉
切この胄を宮年持行く　芝居
くるも呉れぬ一瓶乃酒　牛洲

滝うつ音には頃あきぬ　鱗太夫　金樹

跡帳は張りくさくの筆　大哉

吹ちる籾のさつく其中に　紫竹

水やあらぬ多糸の糸　湖邊

おるふるゝ玉の保りの蜻蛉　松丘

伯母の情を海姉子　今昔

神祈る黄の子あれ少つかす　依山

壁ほろくとあ里像古ひぬ　太郎つ

会絵の本乃あたりに三月綱　一哉

霧とかくらてを川流のく　梅山

活き報法お上れ秋さいて　菊明

我文あ者南子阿海太郎つ　梅窟

有識り柱にかけ漬筒　閑山

釜の吟ふ子を穿てと一休　河柳

器ふ住と降て晴れ村雨　泉流

一句を影す　冥乃門　滴翠

借銀を古ふ御よ神置　洒竜

禁酒を書ふ四十二の石　石甫

錦帳よりやめる妹を写生して　凍鶴
秋もなかばの雲水の霞　芝峨
朝よりは伏見の移りゆくと　馬霞
本所の家に用の弱引　芝洲
伊勢の海辺のみつみ浪たち　世外
酬ふのきもはをとは十五年　柳蛙

右五十韻四月十四日於地蔵
湯生一炷書者

清風や月と心の弓を吹く　雲舟
学ようしろ見せたる余寒じ　金谷
海鼠ねてよき酒ほしき夕やし　柏葉
秋風や仏に捨むる一つ　三角
国に来たんもあこし松の内　梅山
白の鉢鐘や引つく桜じ　素竹
筆の跡みるも尊し苔の花　龍口
牛買て帰さく村へ戻りけり　其伯

月くらく酒三時より入夜かふ　唯一

一里を養ふ井戸の掘り　大哉

活花や余宅を訪る一日ふる　雪蕉

鬢剃て初午の風に吹かれけり　昼夜

若艸に低き下駄はく美人ぐ　梅哉

叅見んや　源汐の舍りの蜆汁　丸漁

筆を赤い墨先かをる吉書ぐ　白人

学ぶや昨日移りし市の庵　翠軒

涼しさや芒を潜る いさら川　梅屋

水原に硯の命全か斗し　一粟

いたつらや鶏頭赤き秋分い　不鮮

信玄の棒道見ゆる七夕　月河有

小秋を我や親ひ小犬うふ　芙山

酒を載す人誰ぞ蔵の陰　魚木

とくとくの清水一人一炉い　一毒

登山口京一地彩清水茶　清海

秀才の名ある二人四河豚汁　其葉

酒堂や つにかけたる梅小笠　知老

二階より眺つく山や時雨　金抽
時雨山田の杉のありやなし　秋山
流華を志て幸にのらぬ小舟　六合子
白梅や能師の軒ハ傾ぶ　滿翠
陽炎や轍のあとの水たまり　の丸
春の雪渦巻の搬を乱す　真雪
時雨一湖四山の天地かな　泉湖
白菊ハ清黄菊ハ朧かほ　竹洲
解顔を叢の牛にかゝ色の星　茶丸

陽炎や石つて仕舞ひの硯水　菊明
天竺の地獄ゑ梅の花　和楸
蝶飛や売り物のたゝる草臥　其梅
学問の言葉おかしき朝茶湯　鼎山
雷の正体みたるを不二詣　吐好
侍従姫や白つゝ動くん心　松山
魂ハ蛍ゑ物ゑ毛もゆく　今昔
山つゝ沼許ゑ水て年忘れ　玉菊
沼の蓮ゑ雲りにさける仰未ゞ　未醒

様子上れハ風ゆらく吹く柳哉　右馬之
五位ものゝ別墅の世ゝろまほゝ　美山
うつゝなく柿積てある小店や　鳴鶴
蔭の葉中ゆくく包むいちゝ哉　石甫
御勅使れ住居を建屋の二重い　不村
今朝の秋鍋の釣とり捨てにけり　九寸児
没句把と師れ一喝やねん像　獅子吼
揚餅阿蘭面中盛へかまま　未山
釈奠や幸義の命めつらしき　閑山

早蕨や独逸十安の杖軽し　泉楼
足出くつゝを蜂れ来りけり　亜友
ぬき捨てし簑の雫や花の白　槻月
世捨人集ひにけゝ百番　有分
建立の石碑新にかけろ〳〵是　松丘
古庭の美膳に咲ず牡丹い　礎水
杖のもし千歳のこゝろをり糸　柳不
石女の名月に顔をむけ、ま　一路
世この人真かけ美一百千号　明哉

夏百日寺色聲香味觸法　香露
学ぶやうあがらの客ひとり　喜泉
青山ふもとの一点やいかのほし　玉峯
太平の刀八精兵鬼八分　友好
人いつく月八昔の俤みなり　雀人
風吉の音一時ふるふる　楊
古来詩案陶淵明　一翠
初序の兵江下るみつき船　庭雀
明月の長耳に近き霧の音　龍洲
妙伸

見古来の道の跡や荒老　三朝
時集つれたきるあるあと　知角
農村の冨ましみれ桑葉　玉泉
ついと手を我つ入るもるい　半舟
我妹の病急たり楊餅　花月
亡人の毛里吉むるく郭公　一雪
芦鶴の合村よ詩あり時雨　梅軒
種先から月をゆりもす世ど　月聲
親も風まもみれ雲の陣　梅寮

雑和に春のつゆ　余寒かな　青角
青苔馬上の人のせくまり　明立
大きなひる寄経や本道花　豊春
夕ゝ宵柳の白とみりよけり　晴嵐
遠ゝ寶塔よ風光り鳥　五芳
舟をみる老や千年も寒からん　永隙
湖やゝ神処ゝ　泊浮く　吐情
人の住む限り青田の續おろ　糖齊
尼ゝをとゝ小柳のそゝ〳〵久春　正拙

畠打の良氏時を違りけま　然竹
拝拝や鎌倉山ゝ日のたける　一の遊
家ゝゝや水田に映る五加木垣　真外
見すりの調度めでゝよ雛じ　静雪
ゝ切や聲の調子やゝ声　衣雪
根ゝ味のもとりて枯るゝ蓮い　大正
ゝ風の吹いろけたる山河い　初音
先へゆく人影ちさき枯野哉　蓮菜
夜田刈の蕪大ゝ積ゝ　似水

神代もかゝりき 神無月 依山
吹紅の風ハさそふ土筆 嵐水
時雨古廟への庭ハ一面じ 真弓
富押せハ夜ふかく月ハ千里じ 清花
負ふ夏ず蛇蘆に汚あり梅の花 深雪
祈るや魚引提げて市の人 有乗
夏痩て急人の美しき 曙光
仲山の月をもとゝ清水さら 一種
けし一向千醒不作 梅の花 象波

学の都をまハる街の姉 凍湖
あけ勝て風のうらみる雪雀じ 義碧
豆売て豆煮る里や秋のくれ 雪樵
侍保姫や海井の水の若葉 真石
蚊柱や百ふるあとを芦月 泉海
名月や山陰かゝる雲低し 山篁
蛙ゆや馬の沓きふ軒の小 明和
筆や新ハ都を知らぬとも 一穀
祈るよ言るし皇の信山 洒落

川ぞひ酒くさき家や冬の月　汀川

屯子や荒雪ものの黒き金屏　照北

枝川ハ蜘蛛の巣もるき夜撥　外舟

雪晴て丘の宮堂桃あかし　とき尼

時雨時々影除の去長し　桃宿

帆汁白炊の湯をあふ〳〵ち　峰雪

向岸のとも〳〵火ともあけて水ぬるい　井月

白梅や陽士ゟ昔ちれかんはき　古蓉

北南他城もふるて玉の春　文義

簑かりてみて迴りけ里江の柳　翠潭

荒百合を崩を小犬吠やうこ　金井

漁を叩く弘ふらりと春ぶ　其盡

我物を踏て戴く蕎麦ふ　松泉

蚊の声ゟ甘い春のたつ日和　喜秋

そんかまの常の顔かや蕎　肉好

物かけ〳〵つゝ拭されつ蔵の台　松齊

野ぬて里北宮ゟぬ余寒ぶ　翠亭

学石茶屋まつれハあちら向　湖邊

八月を市国乾かしてんとして　雲聲

祖母の雛嵐中頭喰てゐらう　柳哉

駒入るゝ牧の芒もしをれ　丘雪

吹ちらすや林端の月一痕　五洲

道端や蜻の塔つむ木仏の苔　五茲

ゆくえを俳諧中病び男行う　小舟

蜻蛉や雲是非と繋すつ柱　對泉

板門よ舟繋くて　一雲の風　伴堤

薮柳の移言ハ梨花の旦哉　梅咲

頭子注子のひしる牡丹の花　白楊

雷一聲堆流の名柴潔し　螢村

ふよくと飜れ石竹花さかぬ　雪麿

世の塵中交らぬ声北斗明じ　英山

道あれて苔の色ひのみたれ咲　曉汀

未だ答む薤北中北牡丹い　一哉

彫磨かんるもこのけぬ柱こうぬ　魯拙
郭公の書すに〜〜〜風光る　八湖
寺住るや菜のむ咲て白もし　寺天
ねぶり強めきま〜〜牡も十郎永　正球
宮詣をめくる舟あり春の風　和香
曲水や下僕の一向凡るうす　小蝶
花寺をしるに嵯峨の一夜い　軒水
縣めーー人に生ル〜甲斐有　呂山

酒載せる梅の朝は十七日　清也
一すぢや天の持立雨みけり　單月
採水の灯を消て鐘ふる　素心
新靴や校長の髪真向ふ床　雪貴
口の餅や三法もむる角力部屋　霞巴
深山まて来の濃や花の浪　門人
追福や行僧もまゐり花の寺　季の芦
百ぢや點滴乃水ありやうす　千山
木ぬ〜や古人を懐ふ馬の上　蛙風

呼田螺沼田に映る月あかし　吐風
氷伐る夜をあたゝかき粕煮哉　豊年
陳列にも墓のまゆりて日の簾　花月
世を捨て隠士の膳や江鮭　華月
二階より橋を見る美人糸　奇峯
夜五尺せゝり魚の呼あかす　大観
しをの通ひ来れたる赤印じ　天心
帰る雁軍書編く灯廬じ　和山

八畳もしくるまで酒の泊りじ　清水
人心きゝよ動くや春の雲　雪渓
名陳の檜俳して天の川　一解
梅咲や安人の宗居清てま　天山
巻く濃く濃の紅葉じ　房山
日ゝらゝ馬上由たかり春の人　幸山
仰ぎ見るはよとり尽す霞盃子じ　名山
住吉ているも牧のるく金りい　正風

刈ちらし流も錦の紅葉じ　妙水
牧やり火よりうをを寄て謡哉　醉花
山つの勅頭虫ん春日うの水　湖紋
時ゝ蜀山人のいひきい　花遊
山焼のひゆる弥生の中へ　洲月
大樫の尖りゝ所やほとゝぎす　杜松
嗽石北小猫も痩て秋の日　竹洲
時ゝ閑時のうれ牡朝ゝ　静
きいる志もやうゝれ釋奠　留粹

子福者のねうり小きくひゆるび　芝洲
掛交のゝ隙や秋の色寄て　三光
夕闇の糸口さくらほたるの家　之吟
仕ゝり塙火起ふる雪を捨　如睦
冬の梅慎ゝ深く咲きたり　よし子
筆流の水ぬるむ日や帰雁　晴嵐
花ん〻珠数くる人の有難や　長示
時ゝさゝ貴人ぬれ微行い　米人
本宮の時ほゝゝる月寒い　蕉舟

夕ぐれの丘や轉移りせり　真風
俳をしの一と月此頃　花球
桃さくや子のふるさとあに湖あり　靜軒
苔かぬ叶畑に主ひとり櫻　蔓持
朝さくらお月ひとり　章球
雲ひとハ雲の境もちかりけり　銀之
犬も恩忘れぬかや墓系　友靜
今山ハ焼れてゐるや草の角　今山
筍ぬるや十万本の雜木山　米艶

やけくと足投もす揚火じ　源氏
奇楠樓を宿の時りやゝ牧き　石保
垣結せハ御るの地之蔓孫沙華　亀山
婦人よきめる酒沙の帝汁　杜人
湯戻りや十字の街ぬ朧よて　弩山
切風をいとりん美麻多ゝい　濱丸
捆経や麻のこゝ京京方昌蕉　玉人
十ぶの湖ゆ一株のつゝじ　泉山
若もちゆ恙よ口の街かゝ　司水

海棠の庭よ牽手すなかれ　竹月

舟宿れば女義一櫻　翻　秋山

彼岸会や赤さかよ絡とぬ仏画い　紫浪

雑誌や人れもちぬや赤の目　竹目

湖や續く沼田やうく蛙　蕎花

故郷の不二ちつ一しやちのくれ　閑居

部ふる水田五反や田螺ふく　好月

早蕨や富士みる地辺の廣々ヒ　孤村

歌塚ばかりの赤ばたらい梅ふ　星峯

水神の線を乗まいて根芹い　一川

ちちりや垣を隔て琵琶の聲　知徐

もいかりて庭三尺のあるしい　渓泉

旅僧や犬の吠つく彼岸い　松風

ぬれ淡いる小ちもありぬ蕨の台　目村

鶯の二度れ餌拾ふ雪解ふ　天外

見あーの命を晴れり遅櫻　希齋（古人）

梅の花黄昏俳句かーるーー　木外（同）

芝齋居士追悼

十五年今やこゝに此青薄　一左
時うる世ハ皆人の泪なれ　巴雪
映りあふ真砂の月を時雨　公樹
不足なる身にも見てうる余寒い　訥堂
花ゆゑ初花をよ過いて朝の雲　素道

碑文の鎖りぬ風かをる中　世外
生ひ茂る蓬の人の時雨　芝池

手すさびの板や根ざしの春の月　芝軒
十五年茲に玉巻く芭蕉じ　雪人

向水や山杜鵑今ハいとすけ　夫猪
四方もの一つ下集ひぬ時雨、　紫戸
その人の夢ぬも月ハ郭公、　惟酔
師とかたりあかせしも夢郭公、　芦雪
時うる十七字経ふ向けゝまま、　魚木
ふるさとの扇の東長恵ふつき　禎山

其昔偶て月ゆゑ時々銀川
時々其月影もすみ五年、柳蛙

追加

銀河も近く青田と竹藪と射川城
炉の名残浦風遠に大工唄雑夫
名月や露を撫ぬ萩芒其翠
時々雷心のもまりけり暫花

改

詞友雪叔居士逝きて後
俳壇の寂寥を感ずること久しく世に
あるの時首を傾へられし一つ星の清よ
遠なる大空の彼方を指さして居士の面
影を愛宕精舎の清池に建立し
像せしを紀念の清東の玉什をも
て上梓せんとす時に居士去て既に
十六年年々日斯道の後輩かくのごき

を見ては又古人の書庵によるものすくふ
しとせず聊か其由来よりを記しを
追善の餞に代ふ
文政六年四月建隆陰幕の日
素丸 乾池識